

シリーズ 景観 59

市は「住むひとが誇りと愛着を感じ、訪ねるひとの心に残る松江の景観づくり」を推進しています。

雪の映える嫁ヶ島

No. 219

『みんなで残したい松江の景観400選集』から
景観審議会が特にお薦めする景観

「冬の宍道湖。雪の降る朝、いつものように散歩の途中、こんもりと雪をかぶったお地蔵さんを見て、寒い中、嫁ヶ島を見守っているように感じました」と推薦いただきました。

静かに広がる宍道湖に浮かぶ嫁ヶ島の姿は松江市の代表的な景観で、昭和の初めには松江市出身の政治家・若槻禮次郎から寄贈された松が植えられたほか、小さな祠（ほこら）や鳥居などが据えられています。周囲240mのこの小さな島は、出雲国風土記では「蚊島（かしま）」と記されていますが、その後、これに「嫁島」の字

があてられ、若妻の悲話の伝説も生まれ、「嫁ヶ島」となったと言われています。

嫁ヶ島は、写真のように鈍色（にびいろ）の空と雪をかぶる松がつくる水墨画のような冬の風景、澄み渡る空がキラキラと反射する湖面に青松が浮かぶ夏の風景、丹色（にいろ）に染まる空と湖面にシルエットとなって映える夕景など、四季や時刻によって折々の姿を見せてくれます。

12月から1月にかけては袖師地蔵から見る夕日に嫁ヶ島が重なります。晴れ間を見つけて出かけてみてはいかがでしょうか。



「みんなで残したい松江の景観400選集」は、市ホームページでご覧いただけます。

【問い合わせ】まちづくり文化財課 ☎55-5387

松江の景観400選

検索